

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32622

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381324

研究課題名(和文)成人自閉症スペクトラム障害に対するデイケア機能を活かした多角的支援法の開発

研究課題名(英文) Development of psychiatric rehabilitation program for adults with autism spectrum disorders (ASD) and its clinical application for those with divergent background

研究代表者

加藤 進昌 (Kato, Nobumasa)

昭和大学・発達障害医療研究所・所長

研究者番号：10106213

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：烏山病院では2008年より成人ASDのデイケアを開設し、その後晴和病院でも展開。両院の受診者は5000名を超え、当事者のコミュニケーションスキルの向上に全20回のプログラムが効果的であることが分かった。プログラムは2017年にマニュアル、ワークブックとして出版された。当事者の特性別に1)女子2)ジェンダー3)家族4)パートナー5)大学生6)音楽運動療法のグループごとに効果を評価した。一部は解散したが、1)ジェンダーは著しい社会的スキルの進歩、2)家族会は支援団体の設立と自助支援、3)増加する大学生に複数の大学がプログラムを実施、4)音楽療子は共感性を高めるのに効果的であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：We have started the rehabilitation program for adults with ASD since 2008, first in Karasuyama Hospital, and then in Seiwa Hospital. Since then altogether more than 5,000 people have visited two hospitals, and we have found that the rehabilitation program, composed of 20 sessions for 3 hour daily, once a week, is effective to facilitate the communication skill for those with ASD. The Program has now been published in 2017, as two books, training manual and workbook.

In this research, we have evaluated the effects of our rehabilitation program in several different groups with different backgrounds; 1) young female adults, 2) adults with gender dysphoric features, 3) support program for the families of ASD patients, 4) support program for the spouse of patients, 5) university students with ASD, and 6) effect of group exercise with music therapy.

After 3-years investigation, substantial progress has been accomplished in these groups, though some group have been disengaged.

研究分野：発達障害

キーワード：発達障害 自閉症スペクトラム(ASD) 感覚統合 ジェンダー デイケアプログラム

1. 研究開始当初の背景

自閉症をはじめとする発達障害は、発達障害者支援法の施行(平成17年)によって特別支援教育の体制が整備されつつある。また古典的自閉症(Kanner型)については、就学前の児童を主な対象として十分とはいえないまでも、数十年前から療育の試みが続けられてきた。一方で、アスペルガー症候群という概念の提唱(L. Wing; 1981)以降、知的にはむしろ平均以上でありながら社会性(対人相互性)に独特の偏りがあり、根底に自閉症と共通する障害をもつ一群が世界的に注目されるようになった。今日ではこの一群をスペクトラムとして自閉症スペクトラム障害(autism spectrum disorder, ASD)と総称することが共通認識となっている。

わが国でASDが広く知られるようになったのはここ10年ほどと思われるが、そこで明らかになってきたことは、その頻度の高さ(一般人口の約1%とされる)と成人例の多さである。彼らのもつ社会性の障害は義務教育期には見過ごされ、自立と社会参加が求められる高等教育や就労の段階になって顕在化することが多いのである。昭和大学付属烏山病院では図1に示すように2008年から専門外来とデイケアを開設しているが、受診者は4年で2000名を超え、しかも予約の希望者はその数倍以上にのぼっている。

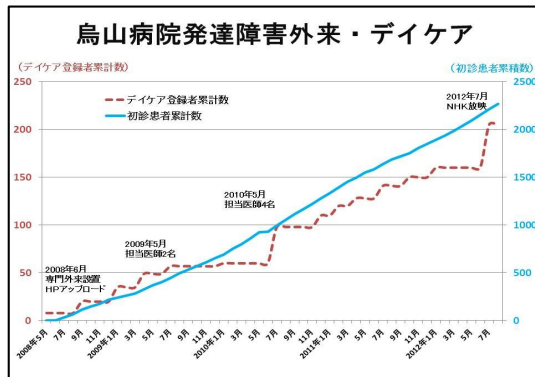


図1

申請者らは、戦略的創造研究推進事業(CREST)として、自閉症の社会性障害に焦点を当ててその脳科学とホルモン(オキシトシン)による治療的試みを続けてきた。それによって当事者たちの認知の歪みを脳機能画像として検出することが可能になりつつある。一方で当事者の困難を軽減する試みとして開いたデイケアで支援を行っている(図2参照)が、彼らがデイケアで明るさを取り戻し、特に薬物を用いることなくある程度自己認知を獲得していくことを経験した。デイケアが彼らの安心できる居場所として機能していることが大きいと思われるが、コミュニケーション能力の向上や自らの障害を受容する過程も要因として見逃せない。このような過去数年の申請者らの経験をもとに、現在必要なのは「教育モデル」の構築にあると考え、本申請に至った。

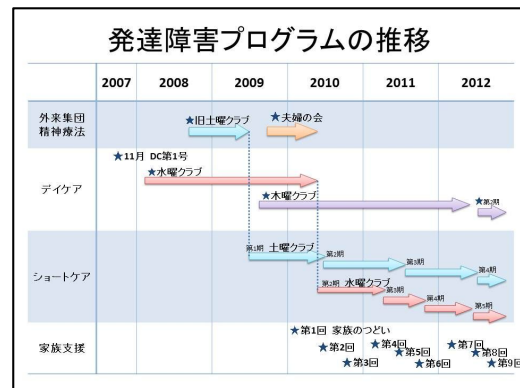


図2

2. 研究の目的

本研究の目標は、生物・心理・社会の多角的アプローチによって、先行するCREST研究で達成した「医学モデル」をもとに、**新たな「教育モデル」の開発**を目指すものである。自閉症研究はいまや世界的な関心の的になっているが、成人ASDを対象とした当デイケアのような大規模なものは国内にはまったく無く、おそらく世界でもまれと思われる。

ASDは頻度の高い疾患であるが、特に成人では診断基準が整備されておらず過剰診断や過小診断のおそれが高い。それを避けるためには客観的診断法を開発することと、十分な臨床例を確保する必要がある。その点で申請者の施設は、すでにCREST研究で十分な診断技術の蓄積をもつとともに、その規模の大きさが最適な環境といえる。これこそが本研究の最大の特色であり、かつ独創的な点である。

本研究で得られた成果は、特に高等教育レベルでの特別支援教育に資することが期待される。先進国では学生の資質に即した多面的な教育環境が整えられつつあるが、この点でわが国は画一的・教条的な側面が目立ち、大学教育の方法論で立ち遅れが目立つと言わざるを得ない。いじめや偏見から来る二次的な障害を防ぎ、一方で彼らの特質を生かして社会貢献に導くことこそが、将来の特別支援教育の目標であり、そこに寄与することが本研究の最大の意義といえよう。

3. 研究の方法

申請者らによる先行研究の成果をもとに、デイケアに参加する当事者の特性やニーズに合わせたグループごとに研究チームを構成して支援プログラムの開発を行う。具体的には1)女子会(少数派である女性当事者の特性解析)、2)ジェンダー(男性のジェンダー意識の心理分析)、3)パートナー支援(夫婦の協働と学児支援)、4)家族会(家族心理教育のマニュアル化)、5)感覚統合訓練(治療的介入の試み)の各グループである。これらの属性・特性に固有の問題を探り、個別支援プログラムを開発する。グループごとの特性分析と支援効果の客観的評価を行う。それによって、共通するASDの

社会性障害に対する多角的アプローチによる支援法の開発を行う。

このようなグループの特性に着目したダイケアプログラム開発を通じて、ASD に共通する社会性の障害とは何かを探り、同時に個別の教育プログラムのパッケージ化を図る。感覚統合訓練などについては、介入群と非介入群に分けてその効果の数値化を試みる。

以上のような研究の流れと研究組織の構想を以下にまとめて図示した(図3、4)。

研究計画の流れ 医学モデルから教育モデルへ

CREST 研究(平成20~25年度)で目標とした医学的モデルの構成から、ダイケアでの経験の蓄積をもとに、新しい教育モデルを目指した本研究につながる流れを図3に示した。

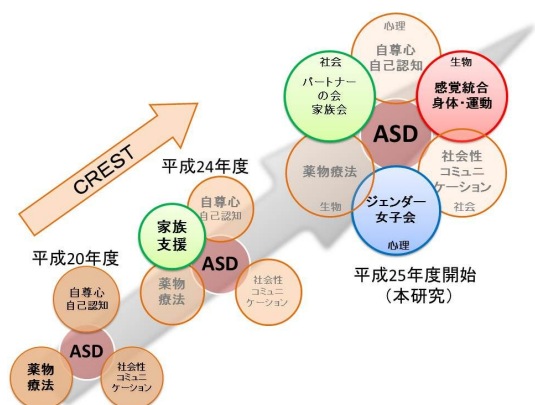


図3 研究計画

研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性 特別支援教育の新たな地平へ

研究組織は上記のような**教育モデル研究の構築**を目指して、チームを形成した。それぞれ1)性分化と脳科学、多元心理学(定松)、2)性同一性障害に関する臨床心理学(有木)、3)脳科学を生かした発達心理学(金井)、4)臨床精神医学(稲本)、5)統合医療と保健医療、感覚統合教育(小口)に豊富な経験を要するメンバーで構成した。最終年度には今後支援を本格化させるべく注目している大学生グループの研究を進めることの出来る分担研究者(丸田)も加わった。

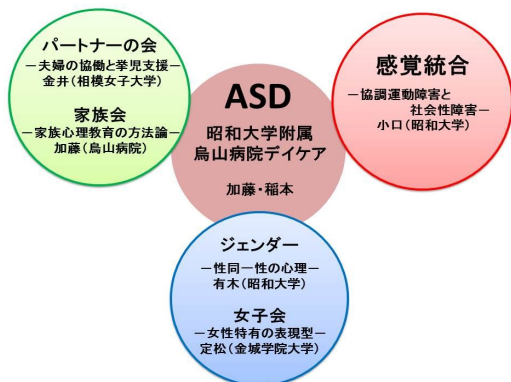


図4 研究組織

4. 研究成果

成人自閉症スペクトラム(ASD)のダイケアについては、ショートケアプログラムは全20回のマニュアルとワークブックとして平成29年4月に星和書店より刊行された。本研究はこの標準化プログラムを基礎として、当事者の特性別にグループ化して、付加的プログラムは必要か、必要とすればその規模と内容はどのようなものかを探った。同時にそれぞれのグループでの成果を発表した。

1) 感覚統合訓練としての音楽運動療法を、平成27年度までに全6回のプログラム中4回以上参加できた症例数は合計で22名となり、気分とQOLの変化を質問紙法で評価した。抑うつ気分、混乱、身体機能、社会的役割といった項目で有意に改善がみられた。この成果は平成28年11月の台湾高雄市における国際会議シンポジウムで発表した(小口)。2) ASDは男性に多く、配偶者は多くは女性である。無意識のうちに現れる妻への気配りの欠如、非言語的コミュニケーションの無さから妻がうつ状態になる状態は、マスコミによって「カサンドラ症候群」という名称が喧伝された。その症状があるとして研究代表者の外来を訪れる夫婦が最近飛躍的に増えつつある。彼女らを集める「パートナーの会」を3回実施し、参加者からは強い支持が得られ、その様子は読売新聞に掲載された(加藤、金井、定松)。3) 当事者の手記を雑誌「治療」で計16回行った(定松)。4) 大学生(同等レベルの若年者も含む)対象の月1回のグループワークを開始した。成果について平成28年8月に関係者が集まり、意見交換をした(加藤)。一橋大学では付加的プログラムでグループワークを実施し、ピアサポートの関係がグループ内に芽生え、相互理解が進むことを発見し、日本精神神経学会のシンポジウムで発表した(加藤、丸田)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計13件)

Kanai C, Hashimoto R, Itahashi T, Tani M, Yamada T, Ota H, Iwanami A, Kato N. Cognitive profiles of adults with high-functioning autism spectrum disorder and those with attention-deficit/hyperactivity disorder based on the WAIS-III. *Research in Developmental Disabilities*, 査読有, Vol.61,2017,108-115, <https://doi.org/10.1016/j.ridd.2016.12.008>

横井英樹、月間紗也、内田侑里香、加藤進昌、精神科ダイケアにおける発達障害者への心理社会的支援、日本精神科病院協会雑誌、査読無、35巻、2016、pp.45-50
加藤進昌、第20回年次大会教育講演「成人発達障害のダイケア - ショートケアプログラムの標準化に向けて -」、ダイケア

実践研究、査読無、20 巻、2016、pp.50-54
森井智美他、性同一性障害・性別違和の評価、精神科、査読有、29 巻、2016、pp.108-114

加藤進昌、横井英樹、五十嵐美紀、成人アスペルガー症候群の診断と患者支援、新薬と臨床、査読有、64 巻、2015、pp.664-669
金井智恵子、加藤進昌、発達障害へのアプローチ - 最新の知見から 成人期の発達障害 - ASD の最新の研究と臨床報告について、精神療法、査読無、41 巻、2015、733-742
金井智恵子、精神科臨床評価検査法マニュアル(改訂版)心理検査「発達障害の評価」、臨床精神医学、査読有、44 巻、2015、152-157

金井智恵子、精神科臨床評価検査法マニュアル(改訂版)心理検査「作業検査」、臨床精神医学、査読有、44 巻、2015、158-164

加藤進昌(監修)、定松美幸(編集)、私たちはこんな世界を生活している - アスペルガー症候群の当事者研究 -、治療、査読無、97 巻、2015、1808-1809

金井智恵子、加藤進昌、大人になったアスペルガー障害の保護者たち、児童心理、査読無、68 巻、2014、41-47

加藤進昌、発達障害を特集するにあたって、最新医学、査読無、68 巻、2013、1985-1987

金井智恵子、加藤進昌、大人の発達障害専門外来の歩み、最新医学、査読無、68 巻、2013、2207-2214

金井智恵子、加藤進昌、自閉症スペクトラム障害を対象にした親子の会の影響について - 夫婦関係を中心に -、精神科、査読無、22 巻、2013、679-686

〔学会発表〕(計 13 件)

加藤進昌、発達障害と就労支援 ~うつ病リワークデイケアと発達障害デイケア~、第 9 回うつ病リワーク研究会年次研究会、招待講演、2016 年 4 月 24 日、京都

五十嵐良雄、加藤進昌、シンポジウム: 大学生の発達障害の現状と対策、第 112 回日本精神神経学会学術総会、招待講演、2016 年 6 月 2 日、千葉

丸田伯子、シンポジウム: 大学生の発達障害の現状と対策、第 112 回日本精神神経学会学術総会、招待講演、2016 年 6 月 2 日、千葉

Emiko Oguchi, Effects of group exercise with music therapy as a day care program for adults with autism spectrum disorder(ASD), 2016 PRCP Scientific Meeting, 口演発表、2016 年 11 月 4 日、台湾

小口江美子、脳血管障害後遺症の麻痺などの障害により体を動かすににくい人達に対する音楽運動療法プログラムの心身への効果、第 16 回日本音楽療法学会、口演発表、2016 年 9 月 17 日~18 日、宮城

丸田伯子、発達障害と教育 - 大学の取り

組み、第 4 回成人発達障害支援研究会、招待講演、2016 年 11 月 19 日、東京

加藤進昌、発達障害とは何か - 子どもから大人まで -、平成 27 年度千葉県医師会医学会第 16 回学術大会、招待講演、2015 年 11 月 3 日、千葉

小口江美子、市村菜奈、小口理英、岩井信一、音楽運動療法プログラムの高齢参加者の心身に及ぼす効果 - 主観的及び客観的指標による学習プログラムとの比較検討、第 15 回日本音楽療法学会、口演発表、2015 年 9 月 11 日、札幌

加藤進昌、高機能発達障害の職場における課題と精神科医療の取り組み - 総論・成人の発達障害とは、第 110 回日本精神神経学会学術総会、招待講演、2014 年 6 月 27 日、神奈川

加藤進昌、精神科医療と代替医療 - 発達障害とは何か・代替医療の可能性 -、第 17 回日本アロマテラピー学会学術総会、招待講演、2014 年 12 月 20 日、神奈川

Emiko Oguchi, et al., Influence of listening to music on oxy-hemoglobin concentration in brain, 国際音楽療法学会、2014 年 7 月 7 日~12 日、オーストリア

加藤進昌、自閉症スペクトラム(autism spectrum disorders; ASD)の過剰診断、第 33 回日本精神科診断学会、2013 年 11 月 8 日、滋賀

加藤進昌、思春期以降の発達障害 ~ 特に不安障害・パーソナリティ障害との関連について ~、第 6 回日本不安障害学会学術大会、2014 年 2 月 1 日、東京

〔図書〕(計 5 件)

加藤進昌(監修)、横井英樹、五十嵐美紀(プログラム作成・編集)、小峰洋子、内田侑里香、月間紗也(編集)、星和書店、大人の自閉症スペクトラムのためのコミュニケーション・トレーニング・ワークブック、2017、96

加藤進昌(監修)、横井英樹、五十嵐美紀、小峰洋子、内田侑里香、月間紗也(執筆・編集)、星和書店、大人の自閉症スペクトラムのためのコミュニケーション・トレーニング・マニュアル、2017、212

丸田伯子、金子書房、ハンディシリーズ 発達障害支援・特別支援教育ナビ(第 9 章 支援が難しい事例への対応 未診断の学生への支援など)、2016、112

Kanai C, Tani M, Kato N. Springer, Clinical characterization of adults with Asperger's syndrome - Clinical data bases of outpatient clinic at Showa University Hospital for adults with ASD in Japan - , Comprehensive guide to autism, 2014, 1861-1883

Yokoi H, Kim SY, Igarashi M, Komine Y, Kato N, Rowman & Littlefield Publishers,

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

http://www.showa-u.ac.jp/rsch_acad/midd/index.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 進昌 (KATO, Nobumasa)
昭和大学・発達障害医療研究所・所長
研究者番号：10106213

(2) 研究分担者

小口 江美子 (OGUCHI, Emiko)
昭和大学・保健医療学部・教授
研究者番号：50102380

稲本 淳子 (INAMOTO, Atsuko)
昭和大学・医学部・准教授
研究者番号：20306997

定松 美幸 (SADAMATSU, Miyuki)
金城学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：90252387

金井 智恵子 (KANAI, Chieko)
昭和大学・発達障害医療研究所・講師
研究者番号：00611089

有木 永子 (ARIKI, Nagako)
東洋学園大学・人間科学部・講師
研究者番号：40319611

丸田 伯子 (MARUTA, Noriko)
一橋大学・保健センター・教授
研究者番号：50343124

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

森井 智美 (MORII, Tomomi)
松村 雅代 (MATSUMURA, Masayo)
横井 英樹 (YOKOI, Hideki)
五十嵐 美紀 (IGARASHI, Miki)
小峰 洋子 (KOMINE, Yoko)